

鈴木和也

「おんりえど厭離穢土 ごんぐじょうど欣求浄土」

混沌とした現代社会を真に明るい豊かな社会へと導くのは私たち青年の責務である。私たちは今、この国の悠久の歴史の中で光り輝く未来を信じて、学び、そして行動する責任世代であることを自覚しなければならない。
青年たちよ、須らく奮起せよ。そして、取り戻すのだ、日本の矜持を。

はじめに

1560年、今川義元が桶狭間の戦いで織田信長に討たれた時、今川軍の尖兵の隊長であった徳川家康は命からがら故郷（岡崎市）の大樹寺に逃げこんだ。家康は己のふがいなさを悔やむと共に、総崩れとなった今川勢の前途を悲観し、もはや自分の命はこれまでだと考え、大樹寺にある先祖の墓前で自害しようとする。その時、時の住職・登誉上人に諭された言葉が「厭離穢土 欣求浄土」である。「お前は若い時から戦場に向かっているけれど、その心はただ敵を倒すだけにあるのか。功をたて、城を落とし、国を奪って、それでお前は何がしたい。乱世の世は、武士が私利私欲のために戦っているで国土が穢れている。正しい目的をもって住みよい浄土にするのがお前の役割だ」と説かれ、「志が小さい、もっと大きな志をもて」と強く諭された。自身の為すべき役割に気づいた19歳の家康はその後、この8文字を旗印に平和な国土の建設に邁進し、265年に及ぶ天下泰平の世を築き上げた。

人は、人生において幾度も挫折するものである。しかしながら、目指すべき夢が明確ならば、必ず乗り越えることができる。そして、幾度も困難を乗り越えた強靱な精神と情熱をもった人は、自信と誇りに満ちた活力ある人生を手にすることができ、周囲を希望の光で照らし出すことができる存在となる。家康は、様々な挫折を乗り越え苦しみを糧とし、夢や目標に向かって突き進んだことで、念願の天下泰平の世を築き上げることができたのだ。

「人生において最も大切なのは経験である。」

これまでの幾多のJC活動・運動を通し、どんな困難が立ちはだかつて也不可能を可能にしてきた場面を何度も体感してきた私自身だから、そう断言できる。志を高くもち行動した者だけが得られる、かけがえのない経験がある。だからこそ行動するのだ。特に青年期における経験は、その先の人生を大きく変える。人生において「成功」は約束されていないが「成長」だけは約束されている。それだけに、時代の変革者たらんとする私たちJAYCEEには失敗を恐れない積極果敢なチャレンジ精神と行動力が今、求められている。それにより、人間的魅力をもった強いリーダーシップを得ることができるのだ。世の中の営みは全て「人」によって成り立っている。この混沌

とした現代社会にあっても行動的で意気あふれる人財が育ち、活力に満ちあふれた地域をつくり上げていくことが、必ずや「たくましい国」日本を創造していくのだ。だから私たち J A Y C E E から光輝く未来に向けて奮起するのだ。

この国を牽引する責任と使命

J A Y C E E の多くは、中小零細企業で経営に関わるメンバーである。私の出身地は地方都市であり、決して大きくはない経済圏において生業を立てている。私は、自分の会社においてはプレーヤーであり、そしてマネージャーでもある。その両方の役割を経験しながら社業を営んでいるのである。2008年のリーマンショック以降、多くの中小零細企業が倒産した。会社が倒産して行き場を失うのは、経営者や経営幹部などのマネージャーたちではなく、概ね健全に従事している一般社員つまりプレーヤーたちだ。だから彼らは誰よりも会社の経営状態に関心を持ち、社業の発展を心から願っている。そして、会社の繁栄の中に自らの幸せがあることを知っているのだ。そんな彼らを私は、大切に守らなくてはならないと日々、思うのである。

私たちと国や地域の関係も同じである。国や地域と私たちの生活は直結している。万が一国が凋落すれば危険にさらされるのは私たち国民である。また、地域が衰退すれば、次世代の子どもたちに故郷をつなぐことができないかもしれない。国や地域をより良くしようと牽引するのは、決して政治に携わる人たちだけではない。だから、これからも私は心眼と矜持をもって国や地域に常に関わっていきたい。そして、それは決して難しいことではなく言い換えれば、人々が属する家族や会社といった身近な社会と接点を持ち、大切に想うことから始まっているのである。家族を守り、友を助け、地域を愛し、国を想う。この国の一員である私が能動的に変わることから、水面を走る波紋のように社会が変わっていくのだ。だから先ず、私自身が責任と使命を感じ私の大切な人たちにとってかけがえのない存在になろう。そこにいなくてはならない存在になろう。そんな私の小さな変化から世界は変えられると信じている。そして、世界、国、地域、家族などに属している者として、自分の立ち位置を確認し何をすべきかを青年会議所で学び、そして行動しよう。誰よりも明るい未来を望み、日本を牽引するのは責任世代である私たち青年でなければならないのである。

必ず日本は矜持を取り戻す。この国は必ず復興する。絶対に再生できる。試練や悲劇的な経験もすべてこれからの未来への糧とするのだ。私たちが何をすべきか、どこへ向かい歩むべきか指し示してくれたのが震災後のわが国、日本なのだから。

「たくましい国」日本のかたち

今、どれだけ日本人が一国民であることに誇りを抱き、目の前にいる家族が住み暮らす地域、この日本の未来に希望をもっているのだろうか。日本というこの国を大切に感じ、その拠りどころとなる豊かな文明や先達が築き上げてこられた価値観、歩んでこられた誇りうる歴史があるにもかかわらず、私自身にもこの国の未来に対する言い知れぬ不安が脳裏をよぎる。戦後の日本は国家として迷走し、本来あるべき日本とはあまりにもかけ離れた姿を形成してきたのではないだろうか。そして、その要因

は、戦後のGHQ（連合国軍総司令部）の統治政策にみることができる。GHQの占領政策の目的は日本国家の解体であり、日本を日本たらしめてきた、あらゆる価値観が否定され、日本人から矜持を奪う結果につながった。こうした状況の中で作られたのが現行の日本国憲法である。憲法の出自については、私たちも近現代史の検証や憲法問題の取り組みで明らかにしてきたが、押しつけられた憲法と批判するだけでは意味が無い。これまで国家とは統治（権力）機構としての側面だけにとらわれがちであるが、歴史・伝統・文化を共有する歴史的な共同体と捉えるべきではないだろうか。幕府使節随行員として清国へ渡った幕末の藩士たちは、欧米列強に国益を搾取され、国土を蹂躪されている清国を目の当たりにし愕然とした。そして、内乱が治まり、政情が一時的に保たれていることだけで安堵する清国の人たちを見て強い危機感をもったという。その危機感とは、直接国益が損なわれることに対してのものではなく、自分たちの力で自分たちの国を護ろうという意識がなくなってしまうことに対してのものであった。国家を歴史的な共同体と見れば、今を生きる私たちの世代だけでなく、この国を創り今日の礎を築いてこられた先達の世代、そして、これから生まれてくるすべての日本人によって構成されているのが日本国家である。この過去から現在、そして未来へのつながりを強く意識し、私たちは先達の声に耳を傾け、未来への可能性を切り拓いていかなければならない。それが過去と未来のつながりに立つ私たちの責任だ。憲法は国のかたちの根幹であり、これまでの歴史・伝統・文化、そして受け継がれてきた精神性に立脚したものでなければならない。これまでの護憲、改憲といった二項対立の議論から脱却し、今こそ、私たちは未来に希望を託すことのできる国家像を、憲法論議を通じて描いてみたい。そして、青年らしく変えるべきは変え、守るべき理念は守ることを正々堂々と主張すると共に、全国各地で更なる憲法論議が深まる運動を展開したい。そして、わが国の憲法が国民の手により築かれることを信じている。

海洋国家・日本の姿

自分たちの住む日本が四方を海に囲まれ、海から多くの恩恵を受けている海洋国であることを、私たちは認識しなければならない。日本は国土面積こそ38万平方キロメートルと小さいものの、日本の領土・領海とEEZ（排他的経済水域）を合わせた面積は447万平方キロメートルにも達し、世界第6位の広さを誇る。この数字をみれば、わが国が海洋大国であることが理解できる。そして、近年の調査では、南海トラフ、北海道周辺海域に、6兆立方メートルのメタンハイドレートが存在すると言われており、エネルギーの大半を海外からの輸入に頼っているわが国にとって、潜在的な可能性が期待される場所である。他方、東シナ海では日中間のEEZが重なっており、日中中間線の4キロほど西側に位置する白樺ガス田の開発に急速な経済成長によりエネルギー問題を抱えた中国が着手している。日本政府は鉾田が日中中間線を越えていると抗議するものの、開発は今なお続いており、相対的にわが国の国益は損なわれているのである。1968年国連アジア極東経済委員会（ECAFE）が東シナ海の海底調査を実施した結果、尖閣諸島近海に埋蔵量豊富な油田がある可能性が高い

ことを発表した。その数年後に台湾、中国が突如として尖閣諸島の領有権を主張し始めたのだ。東シナ海ガス田開発問題もこうした歴史的文脈にあることを、しっかりと理解しなければならない。歴史的にみても尖閣諸島は、わが国固有の領土であることに疑う余地はないが、果たしてどれだけの国民がこのことに意識をもっているだろうか。領土・領海問題は、わが国の主権に関わる問題であり、私たちの無関心が国益を損ねていることを自覚しなければならない。私たち日本人は、北方領土・竹島を含め、この国の領土・領海を正しく理解し、そこにある天然資源を大切に守り、未来に向けて守りゆく意識を高める運動に取り組んでいきたい。

この国を牽引するグローバルリーダーの育成

失われた20年と言われるように、かつて日本が誇った技術力や経済力は、台頭する新興国との国際競争の中で相対的に力が低下しているように感じる。また、政治・経済・社会のシステムも行き詰まりを見せている。しかしながら、それ以上に憂慮すべきは、日本を支えてきた大切な価値観や他を慮る心といった日本の伝統的な精神性に国民の大半が価値を見出せなくなっている状況だ。本来、日本が今後選択すべき道は、これらの世界に誇るべき日本の矜持に立脚したものでなければならないはずだ。今、社会を覆う閉塞感を打破するために、今一度、日本の矜持を取り戻すべく過去に学び、現状を取り巻く幾多の問題を解決するための知識を得て、行動すべきときなのだ。そのために自国を誇れる歴史観と確かな国家観を兼ね備え、柔軟な発想力と行動力で国民を牽引し、未来を切り拓き、グローバル化する社会の中で活躍できるリーダーをわが国の貴重な人財として育てていきたい。そして、グローバルリーダーを全国各地に広げ、東日本大震災後の社会システムの変革が迫られている。今こそ、「たくましい国」日本創造に向けて、4度目の奇跡を起こさなければならない。

新しい「震災後」時代の礎を築く

東日本大震災が発災した2011年、全国から多くのJAYCEEが被災地支援に駆け付けた。私たちのこの迅速な行動には、各方面から多くの評価をいただいたが、同時にいくつかの課題も残した。今後、OB・OGを含めると200,000人を超えるJAYCEEのネットワークを最大限に活かした支援活動を行うためには、青年会議所という組織の中で有事に対処する体制を確立しなくてはならない。

『人間というのは、もともとその性は善である。しかしその善が表に現れないのは、容れ物である環境が劣悪であるからである』 上杉鷹山

私たちは、震災での反省を踏まえ、共助の領域で多くの人たちが確実に実働できる防災ネットワークの拡充と強化を進めるべきである。そして、災害時に備える防災の備蓄パッケージであるJC-AIDの普及に力を注いでいきたい。この2つのシステムを構築することで、社会に期待され、信頼される組織へと進化していくことは間違いない。これは青年たちが創立から62年の長きに亘り、地域社会に貢献しうる運動

を積み重ねてきた J C だからこそできるものである。

私は共助の領域で自分の自己実現を叶える人たちを応援したいと心から強く思う。被災地での復旧・復興はまだまだ進んでいない。「時計の針」は少しずつ進んでいるように見えるが、時を刻む針の音は、まだまだ力強さを感じない。だからこそ 10 年後、20 年後に活かされる J C 運動を見据え、真の復興がなされるその日まで、被災地に心を寄せる支援体制を整えていきたい。人と人、LOM と LOM がつながる支援を進め、被災地、そして日本の復興という「未来の地図」をしっかりと描いていこう。

日本人としての道しるべ

ここである意識調査結果を紹介したい。高校生に「自分の国に誇りをもっているか」の問いに「もっていない」と答えたのは 48.3% だった。さらに「あなたの身の回りに『あのようになりたい』と思う大人がいるか」の問いに「いない」と答えたのは、小学 6 年生が 19.8%、中学 2 年生が 28.4%、高校 2 年生が 30.5% であった。学年が上がるにつれて、自分の手本としたい大人がいなくなっていることが如実に顕れている。身近に手本となる大人がいない状況の中で、自国に誇りをもてる子どもを育てるということ自体、無理があるように思う。子どもは社会を映し出す鏡であり、まずは私たちが襟を正し、次代に伝えていくべき日本人としての精神的支柱を取り戻すことから始めなくてはならない。それは「日本固有の美德」を基盤とした道徳心なのである。伝えていくべき道徳心は、子どもたちが学校生活や社会に出てから生きていくために、必要な規範であり、心の指標となる。そして、国家や地域への帰属意識を醸成させる自尊心や公共心、他を慮る思いやりの心は、これから子どもたちが、グローバル化が加速する時代を生き抜くために重要な価値観なのだ。子をもつ親として、地域社会を構成する大人の一人としての義務を果たし、子どもたちに日本が世界に誇る「日本固有の美德」を伝えていこう。日本人がこれまで大切にしてきた価値観である道徳心を育む運動を地域社会で推進し、子どもたちを地域で育て、守っていこう。「たくましい国」日本の創造には、多くの学びから培った自信と誇りからなる強さと、過去から引き継いだ日本人の精神性や道徳心からなる美しさを兼ね備えた意気あふれる人財の育成が必要なのだ。

活気に満ちあふれた地域による持続可能な社会の実現

日本の経済が低迷する中で、既に人口の減少と高齢化が足早に同時進行している地域が数多く見受けられ、その現象は、特に地方圏において切実な問題となっている。そして昨今、地域を自立的に活性化する取り組みが真に問われ始めているのである。地域における産業や生活空間としてのまちは、静態的に存在するものではなく、環境変化のもとで地域毎に変化を見せ、また同じ地域内でも時代と共に変わっていく。環境変化に対応できなければ産業もまちも空洞化する恐れがある。グローバル化の進展など地域を取り巻く環境変化のもとで、地域経済の自立的発展に重要なのは、やはりその地域を構成する「人」である。地域を想い、愛する能動的な人々が多く集う地域は必ず活性化する。そんな人々が関わり集う仕組みづくりを継続して行っていかな

てはならない。

これまで、地域に潜在する歴史的文化・人物・食材等をはじめとする資源を発掘し、多くの人々が関わり「地域のたから」へと昇華させてきた。その過程で多くの地域住民が関わり、企業参画を含めたコミュニティ活性化を促し、人と人、企業と地域をつなげた社会関係資本を生みだしてきた。次に注力すべきは、全国へ、世界へ向けて発信することではないか。そのために、今一度、地域で発掘された「たから」を見直す機会をもちたい。真に社会関係資本というつながりが構築された「地域のたから」であるのか、地域の魅力を感じられているのか。資源の発掘、人・企業・地域の関わりなど「地域のたから」へと昇華していく過程をチェックすべき時期にきたと思う。

そして、広い視野と深い見識、卓越した想像力と豊かな人間性を身に付け、常に社会への問題意識と確固たる使命感をもち、積極的・主体的に行動のできる地域のリーダー、つまり地域の核となる人財の育成が必要なのである。本年も、活気に満ちあふれた地域へと導くことができる意気あふれるリーダーを育てたいと強く願っている。

また、これまで環境問題やエネルギー問題について議論を重ねてきた。化石燃料の価格高騰、そして、東日本大震災での福島第一原発事故によって、再生可能エネルギー、水、廃棄物、森林などの環境アセットへの注目が集まっている。特に、ソーラーや風力などの再生可能エネルギーの普及は、地域性が極めて高い。私は環境やエネルギーの問題を地域と結びつけた議論にシフトチェンジしていきたいと考えている。持続可能な社会を実現するためには、地域資源のローカリゼーションが欠かせない。エネルギーをはじめとする地域資源を循環させることが、地域のコストを下げるのである。エネルギーや環境への取り組みを通して地域を活性化する手法を新たに模索する取り組みを行い、活気に満ちあふれた地域による持続可能な社会を次世代に残したい。

「JC版 新・日本風景論」

2013年6月22日、日本の自然信仰や独特の芸術文化の象徴として、富士山と三保の松原が世界文化遺産に登録され、多くのメディアが取り上げ、多くの国民が歓喜した。日本の宝から、世界の宝へ昇華した瞬間であった。今では、富士山への登山者や三保の松原の景観を楽しむ人々がさらに増えている。これにより多くの人々が関わり、自然との共生を生み出し、日本人、そして世界中の人々の心に深く根付くきっかけになったことは間違いない。私たちは、このように少しでも多くの「地域のたから」や日本人の矜持を日本中へ、世界中へ、さらに次世代に発信し伝えていくべきだと考える。

日本が近代化を進める中で、当時の先達がエポックとして取り上げていたものに「日本風景論」というものがある。これは、志賀重昂氏が札幌農学校（現北海道大学農学部）で第五期生として自然を愛し、人を愛し、自らを厳しく律する道を学んでいく中で、明治27年に古典文学からの豊富な引用と、地理学術語を駆使して、日本の風土がいかに関米に比べて優れているかを情熱的な文章で綴ったものである。この発刊は、日本人の景観意識を一変させる出来事であった。各々の地域に存在する「地域のたから」を広く知らしめると共に、地域に住まう人々が共通のたからとして認識するため

に、「J C 版 新・日本風景論」を制作したいと考える。「地域のたから」だけではなく、日本人として大切にしなければならぬもの、美しい精神性なども盛り込み、私たち責任世代の青年が次世代に残すべきもの、そのすべてを集約し、日本の矜持を取り戻していきたい。

恒久的世界平和の実現に向けて

世界に目を向けてみると、紛争や貧困、環境問題など多くの問題が山積しているのが事実である。私は、これらの問題を解決できるカギを握っているのは日本人ではないのかと考えている。東日本大震災が発生し、災害に遭いながらも日本人としての礼節を重んじ、他を慮る精神を示した人々を、誇らしく思ったのは私だけではなかっただろう。また、その姿に対して世界各国から賛辞の声が贈られたことは記憶に新しいところだ。あの時「世界が注目していた」のは、日本人の美しい精神性であった。日本が今日のすさまじいグローバリゼーションの荒波の中で、これまで通り生き残っていくためには、今、改めて日本の自画像、言い換えれば日本の個性を日本人一人ひとりが再認識し、日本らしさを追求すべきではないか。J C I における国家青年会議所としての立ち位置をしっかりと自覚し、リーディングNOMとしての責任を果たすべくメンバー一人ひとりが、「和を以て貴しとなす」の精神でJ C I との連携の中で民間レベルの国際交流を行っていくと共に、多くのメンバーに「世界に誇る日本文化」を発信して頂きたいと考えている。また、2015年に目的達成を迎える国連ミレニアム開発目標（UN MDGs）には、8つの達成すべき課題があり、J C I と国連とのパートナーシップにおいて、特に注力しているマラリア撲滅に向けた運動であるJ C I NOTHING BUT NETSキャンペーンを加速するべく、これまで以上に多くの方々へ普及させる仕組みを考え、的確に実行していくと共に、これからを担う子どもたちに国際社会が抱える多くの課題に対して取り組む姿勢を養い、グローバルな視点で行動できる担い手を育んでいきたい。そして、長年に亘りこれまで継続してきた、個人レベル、地域レベル、国家レベルで、より好意的な民間交流が、アジアの安定と平和に貢献するものであると確信している。さらに、北方領土返還に向けた運動の一環として未来志向な関係を構築すべく、これまで進めてきた日本とロシアの学生による交流を引き続き行っていきたい。

2013年のJ C I ASPAC光州大会のハンドオーバーにて、フラッグが日本に渡った時、胸が高鳴った。2014年は、J C I ASPAC山形大会が日本で開催される。日本のメンバー全員がこの機会をチャンスとして捉え、より多くのものを享受できるよう、設営に関わるメンバーに意気をもって挑んでいただきたい。そして是非、震災から復興に向けて歩みを進める日本の「たくましさ」を伝えて欲しい。

強固なネットワークを活かしてLOMと共鳴する運動

現在、メンバー数の減少、会員拡大、さらなる会員の成長が喫緊の課題となっている。まさに組織が痩せてきたと言えるのではないだろうか。この現象が経済情勢の悪化だけでは割り切れないことは、多くのメンバーが知っているはずである。青年会議

所という組織自体の魅力を実感できないメンバーの増加や、地域の人々のニーズの多様化に起因しているのだと考える。まさに青年会議所の存在意義が問われていると理解できる。青年会議所は、40歳までという限りある時間を共有し、夢を語って互いに切磋琢磨し、刺激しあいながら、人間としての魅力を高めていく団体である。つまり、私たちは人々の意識を変えていくJCという運動体として日々学び、考え、行動しているのだ。日本JC・地区協議会・ブロック協議会への出向を通して、自己の成長と地域や国や世界の発展のために、多くのメンバーが多種多様な価値観で物事を多面的な視点で捉えることのできる人財へと成長する機会につなげていただきたい。大きなフィールドであなたの力を存分に発揮していただきたいと強く願っている。そのために、日本JC・各協議会は、出向するメンバー一人ひとりが次なるステージへと昇る一年になるよう組織運営を考えていきたい。また、35,000人に及ぶ青年経済人の声を背景に、組織力を活かし社会にインパクトを与える運動を共に創り上げたい。本年はLOMと共鳴する一年にしたいと心から願っている。

結びに

「すべての出会いは偶然ではなく必然的なものであり、必ず意味がある
だから、この一瞬を大切にしたい 二度とないこの一瞬を大切にしたいと願う」

この言葉を胸に、多くの出会いの中で、私はどれだけ成長できたことだろう。
青年会議所という学び舎において、一つ一つ積み重ねるそのすべては、自分を成長へと導いてくれていることを確信している。

共に、学び、考え、決意し、行動し、羽ばたこうではないか。
意気あふれ、活気に満ちあふれた「たくましい国」日本を次世代に引き継ぐために。